

平成28年度 第1回 昭島市子ども読書活動推進計画策定委員会
会議録（要旨）

〔開催日時〕 平成28年7月20日（水） 18：30～20：00

〔開催場所〕 昭島市民図書館 2階 閲覧室

〔出席者〕

- 1 委員：俣田委員長、真如副委員長、中島委員、山崎委員、武藤委員、久米委員、大串委員、河村委員、菌田委員
- 2 事務局：小林教育長、山口生涯学習部長、石川市民図書館長、小澤係長、井上係長

〔欠席者〕 清水委員

〔議事要旨〕

- 1 委嘱状の交付
- 2 昭島市教育委員会教育長挨拶
- 3 委員及び職員紹介
- 4 議題
 - (1) 正副委員長の選出
 - (2) 委員会審議の進め方について
- 5 報告
昭島市子ども読書活動推進計画庁内検討委員会の計画（案）について

〔配布資料〕

- 1 日程
- 2 委員名簿
- 3 第三次昭島市子ども読書活動推進計画庁内検討委員会の計画（素案）
- 4 第三次東京都子供読書活動推進計画
- 5 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（国の計画）
- 6 第二次昭島市子ども読書活動推進計画
- 7 昭島市子ども読書活動推進計画策定委員会要綱

[発言要旨]

事務局 委員会審議の進め方についてお話をさせていただく。

ここにお示しした第三次昭島市子ども読書活動推進計画については、皆様方の専門的な立場からご意見をいただきたい。委員会の回数は4回程度を予定し、次回は9月23日金曜日を予定している。3回目を10月頃行い、その案を基に、年内にパブリック・コメントを予定している。来年1月か2月頃、そのパブリック・コメントの回答についても皆様方にご検討いただき、策定委員会としての報告を教育長にしていきたい。

委員長 年内というなかなかタイトな日程になっているけれどもご協力をお願いしたい。

続いて、計画（案）に入る前に、事務局から報告をしてもらおう。

事務局 計画（案）に入る前に、この計画の経過と委員の皆様へのお願いをお話しさせていただく。経過であるが、第三次昭島市子ども読書活動推進計画は、国や東京都の計画及び、「第二次昭島市子ども読書活動推進計画」の進捗状況を踏まえて作成されている。

また、昭島市子ども読書活動推進計画策定委員会に出しているこの計画（案）は、市役所職員で構成する「昭島市子ども読書活動推進計画庁内検討委員会」で検討された案である。

続いて、皆様をお願いしたいことが3点ほど。

1つ目、実際にこの計画を行う人の目線での計画作りをお願いしたい。

2つ目、第一次から「家庭での読み聞かせの重要性」ということが引き継がれている。加えて第三次では、母親だけでなく「父親の読み聞かせ」というものも盛り込んでいる。2つの計画について「家庭こそ」という言い方をしている。ここら辺についても議論をお願いしたい。

3つ目、計画を楽しく実行していけるような、楽しい計画作りの策定をお願いしたい。

委員 審議する我々に3つの視点を出していただいたが、この中で疑問に思うのは「家庭での読書」というふうに言っているが、今、家庭がない子ども、家庭という形があってもない、そういう子どもがいっぱいいる。そういうお子さん達を含めて「家庭」という枠組みで問題を捉えていいのだろうか。

それから「父親の参加」と言うが、やはり特に幼児や小学校期は、親御さんが仕事して家庭にいない場合は、わりと祖父母さんが子育てに関わっていることがある。意外と祖父母さんが子どもの読書や昔話等の役割を果たしている事例がある。そうすると、「家庭で母親と父親」という枠組みだけで問題を捉えていいのだろうか。やはり現状を踏まえた中でそういう分析をしながらこの計画を立てないと、絵に描いた餅になるのでは。

事務局 確かに委員がおっしゃられたように家庭はそのような状況である。そのなかで家庭を補完するということでは是非ご議論いただきたいが、地域、祖父母、学校、幼稚園、保育園、身近な大人が家庭をフォローしていただけたらと考えている。その辺りを是非お願いし、検討していただきたい。

委員長 あとはお考えの事をこれから推進計画の中にどれだけ盛り込んでいけるかということだと思うので、内容に入ったところで様々なご意見をいただきたい。

ではこれから計画（案）についてご説明をいただきたいと思う。

既に庁内検討委員会で検討された結果という事で、冊子が私どもの手元にも届いているので、この内容についてこれからご意見を伺って委員会としてのまとめをしていくという事になるかと思う。事務局からご説明をお願いしたい。

事務局 素案について説明させていただく。

「第三次昭島市子ども読書活動推進計画」の2ページ目、目次で何点か第二次計画との違いがある。目標が加わったところ、第2章の4、5、9が追加となった。

委員 「特別な支援を必要とする児童・生徒の読書活動への取り組み（新）」となっているが、この行数では物足りないのではないか。

事務局 その辺りについては、加筆をさせていただきたい。

委員長 それではいよいよ内容に入っていくということで第1章 基本的な考え方について事務局からご説明をお願いしたい。

事務局 第1章 基本的な考え方

1 第三次子ども読書活動推進計画の策定にあたって

(1) 計画の目的

(2) 計画の位置づけ

(3) 計画の期間

2 子どもの読書活動を推進する「仕組み」づくり

(1)(2)は、読書が生み出す素晴らしい世界を子どもたちに教えるのがおとな、そのなかでも家庭の役割は重要であり、それを補完するのが地域、学校、幼稚園、保育園などの機関あるいは身近なおとな、ということである。(3)は、身近な読書環境の整備が必要だということを示している。

委員 「子どもにとって身近なおとな」とあるが、子ども達がSNSなどのネット社会の中で生きているが、おとな自身はどうか、おとな自身も本を読んでいるか。おとな自身が、子どもが参考になるような読書をしている景色があるか。そのあたりは。私の見る限りでは、おとなも一生懸命電車の中でゲームやスマホをやって、本を読んでいるのはほとんどいない。

委員 今の委員のお話はそのとおりだと思う。やはりこういう計画を立てるときは、おとながどれくらい本を読んでいるか、政府の統計では時間で調べたりされて

いる。NHK生活時間調査では、本を読む時間を調べるとき、それ以外の調査を4つくらいやって、どれくらい本を読んでいるかという調査がある。10年位毎に数値を取る。やはり今のおとなは読んでないというのが顕著に出ている。そういった客観的な数値を踏まえて、議論を進めるようにしないといけないと思う。

フランスのように、1990年代後半に「子どもが本を読まないのは、おとなが本を読まないからいけない」ということで国の法律を改正して、おとなが本を読むようにした。1920年代から公読書運動というものにおとなも本を読むようにと国を挙げて取り組んでいる。

最近のヨーロッパの福祉関係、OECDなどの調査でも「子どもの読解力を支える家庭の中で、おとなが本を読んでいる、つまり家庭の中にある本の数が明確な数値として唯一示される」と結果が出ている。

そういったことを踏まえて、きちっと計画を書き込んでいくということが大切だと思う。

委員 思いだけで書いては流れてしまう。

委員長 それについて事務局の考えは。

事務局 「母子」ということはすごく大事だが、父親の役割も重要なことであり、さまざまな状況を表現させていただいた。

委員 例えば我が家では娘が共働きだから孫が保育園から帰って来て私のところに来ている。家事をやると子どもは放って置かれるから大人しくしてもらわないと困る。最近娘がその間に孫にタブレットを渡しておくアニメを見て喜んでいる。そういう時間を持っている。それが今の家庭の中の実態だと思う。たまたまうちの娘は小さい時から、母親と私も含めて子どもへの読み聞かせと一緒に本を読んでいたという経験があるから「ジジババのところへ行くと本がいっぱいあるからそれを読もうね」と言って、結構じいさんばあさんに「本を読んで」と言う。タブレットもやるけれども、そういうこともやっているという、そういう場を意図的に作っていかないと。お母さんなんかはいろいろなことをタブレットで検索している状況。

事務局 お二人の委員からそれぞれご意見をいただいたが、現状を踏まえてどうしていくのか分析をしないことには新しい計画にはならない。最初に委員がおっしゃったとおりに家庭というものが多様化しており、昔のように「お父さん・お母さん・子ども」というスタンダードのケースでは決してないのが現状だと思う。こちらの計画に関しても、そのあたりのところは配慮させていただきたい。

委員からも専門的なお立場からご意見を頂戴した。客観的な数値を示し、それを踏まえてどうなのかということ「基本的な考え方」の中にそのような文言を加えさせていただきたい。ここは次回までに分析をさせていただきたい。

委員長 委員から指摘があったが、私も孫の状況を見ていると、タブレットを、まだ3歳4歳の子どものために自由に使いこなして動画を見ている。そうすると読書よりも理解が早くて面白い、音声も付いている、音楽も鳴るといふ。そうした子育て環境の変化というものを目の当たりにしているのだから、今の状況を入れ込んでいくということは、読書活動の計画を考える上でそのあたりをさらに強化されるといいかなと思う。

委員 小さな子どもたちに動画を見せるというのは果たしてどうなのか、という問題がある。専門でないのだからわからないのだが、福祉の関係、幼稚園保育園の方はわかるかと思うが、アメリカの医学関係の協会が何年前に出したものでは、2歳児までには動画を見せない。つまり脳の発展から言つて、形を組み立てる脳の力がまだない子どもたちに動画を見せるというのは、脳の発展にとってはあまりよろしくない。小さな子どもたちにテレビや動画を見せるのは極力避けたほうがいいとホームページに出ていたと思う。

そういうのは単に我々の感覚ではなくて、医学的、心理学的、学問的に研究成果があつて、そういうものを踏まえた上で、公的な機関が作る計画にきちっと書き込んだ方がいいと思う。

それはやはり地域の人たち、国民的なレベルでの理解の問題になつていく。

7～8年前来日したフィンランドの女性の担当大臣が「家庭の中で親が本を読むというのは当たり前だけれども、共稼ぎの家で、お母さんが料理をしている間に子どもを遊ばせるのではなく、その時に父親がきちっと読み聞かせをするという男親の役割を果たしていかななくてはならない、ということが国としての課題だ」とおっしゃっていた。

日本はもっと複雑。祖父母が子どもの面倒を見るというのが基本的な社会の傾向としてあるわけ。複雑なので簡単には言えないが、認識としては父親がきちっと家庭でそのような役割を果たしていくというのが重要なことと思う。

委員長 動画に関しては、例えば、家に帰るドライブ中、チャイルドシートから動けない。退屈して「じゃあ時間潰しに動画を見せよう」そういう発想で、もう世の中全体が進み始めているのかなと印象を受けた。結構深刻なのかなと思う。

委員 わりと子どもは自分の頭の中にリアリティのある絵ではなくて、ファンタジックな映像も作れる能力をもっている。だから読み聞かせをやったりすると、面白がつて「次読んで読んで」となる。現実には委員が話している環境が進んでいるわけだから、そういうことと同時に、それに替わる空間を作っていくということが大事。

事務局 読み聞かせについては。

副委員長 少しずれてしまうのかも知れないが「基本的な考え方」のところ「現状と

課題」というのがしっかり入れれば先程の話が折り込めるのではないかと。学校で子どもの生活している時間は長い。そのなかで読書についていろいろな方策を取っているのが現状とすれば、それは良さであると思う。それがじゃあ「家庭に帰ったら…」と先程のあたりは本当にそのとおりだが、そのなかにも幾人かは一生懸命読書を家でしようとしている母親、父親そして祖父母がいる、というもあるので、そのあたりを折り込んでいくと前向きになるのかなと。「現状と課題」が少し入って説明をしていただくといいかなと。

小学校は、ここに書かれている読書の取り組みを一生懸命しようとしている特に熱意というのはすごくあると思う。それは中学校も同じと思う。

委員 やはり読み聞かせるということも必要だが、本を読むときに声を出して読む、これは子どもたち自身に非常に重要。日本の伝統的な学習方法に、寺子屋などは「素読」というのがあって、誦んじるわけ。それが明治維新になってから日本が西洋の色々な文化を取り入れるときに、基礎的な知識になっていたと言われている。「たそがれ清兵衛」の中に、「素読は何で役に立つのか」「今は役に立たないよ」「じゃあ何で素読するんですか」「おとなになったら考える力が培われる。今は役に立たないかもしれないけど一生懸命誦んじなさい」という清兵衛の言葉があるが、そういうふうに、考える力の基礎となるのが、日本の伝統的な学びの素読というところにあるような気がする。

私は地域で落語の会などをやっていて「声を出して読みたい本」などで、「寿限無」をやって、子ども達が一生懸命誦んじる。そういうことを覚えると子どもなりにその情景を頭の中を作る。それでその話をおとなに聞かせるというイメージを作っていく。そういう力ができるのでね。やはり読み聞かせや受け身だけじゃなく、自分から声を出して読む。日常的にそういう力を付けていく必要があるのかなという気がする。

委員 今、読み聞かせという話題が出ているが、中学校は、例えばゲスト、または専門の方をクラスにお呼びしての読み聞かせ、という活動は小学校に比べてはるかに少ないと思う。なぜかというと、中学校の場合は6校、ほぼ全校で朝読書の形を取り入れていると思うが、やはり皆で読む、静かに読むというあたり。一日の朝を静かにスタートさせるという読書活動の目的と、もう一つ、落ち着いた気持ちで朝のスタートを迎えるというようなことも狙いとしてあるものなので、あまり声を出してあるいは読み聞かせて、という活動は小学校に比べて極端に少なくなっているかなと思う。

一方で、委員が話していたが、この前の計画から5年が経過しようとしている中であって、読書のもつ意味、これだけの情報化社会が1年も経てばめまぐるしく変わっていく。それが子どもたちの読書活動に、情報化とともにいろいろな要素が入り込んできているという時代背景だとか分析とかいうあたりが、

基本的な部分で「こう捉えるんだ」というようなことを何らかの形で盛り込んでいく必要があるのかなと思っている。

新しい計画だと「スマートフォンなどの急速な普及は」というこの1行で終了していると思うので、この情報化の波、いい意味でも悪い意味でも子どもたちへの影響、そのあたりは書き込んでいく必要があるのかなと感じている。

委員長 小中の違いもあるし。お二人に共通しているのは、現状の良さと課題について盛り込んでいった方がいいのではないかと、ということが指摘として出ている。

幼稚園保育園での読み聞かせを含む読書の関係という点では。

委員 私は保育園だが、1日を通して子どもたちに絵本、紙芝居、素話などお話をしあける機会は、1日の時間が長いので結構ある。そういった生活の中で、保護者の方にも本の良さとか、文章を通して子どもたちの想像が膨らむような力を、園と家庭で一緒に育てていきたいという思いがあるので、クラス便りなどにも、何故いいのかとか、いつの時間だったら忙しいお父さんお母さんたちが本に向き合って、子どもと向き合って時間が取れるのかなというヒントになるようなことをこちらから発信したりして取り組んでいる。

委員 幼稚園も毎日1話、素話、紙芝居、本等は読み聞かせをしている。週1回子ども達が自分で選んだ紙芝居や絵本を家庭に持ち帰って、家庭でお父さんなりお母さんに読んでもらって返却をするということも年間を通じてやっているが、ただ、幼稚園で感じるのは、ここ数年、夏休みの本の紹介をしても、購入して子どもと一緒に読もうという保護者の方が本当に少なくなった。それをどうしたら保護者の方も親子で選んで読み聞かせをしてもらえるかなと考えているところ。

今までは、夏休みに入ると数冊購入して「これを子どもと一緒に読みたい」という保護者がいたが、ここ何年かはなくなった。数名くらいになってきたので、それがどうしてなのかなと幼稚園でも考えている。

委員長 先程、素読というご意見もあって、本校では、毎月、詩の暗唱というものをやっていたり、年に1回学年で音読の発表をやっていたり、そういった意味では声に出して読むということは力を入れている。担任の前で一生懸命暗唱している姿がとても微笑ましいし、また、頑張っているというところもあるようで、学校としてどれだけそういうことが大切かなというふうに思う。

本日の予定としてはここまでということで、次回が中身に入っていくということで、さまざまなアイデアをいただいて、素案を膨らませていきたいと考えている。

委員 私は公民館運営審議会から出ているが、9月いっぱい任期なので、次までは出られると思う。それ以降は任期替えて別の方が出てくるかもしれない。そのあたりご了解いただきたい。

副委員長　　ちょっと気になるのが、東京都の計画の数字を基にして論じているところがある。はたして東京都の計画で論を進めていいかと気になった。昭島市の計画を作る上で、昭島市の方を優先した方がいいかな。

事務局　　「東京都の」と引っ張っていることは、私が見た限りでは、東京都の「取組み」というよりも東京都が計画の中で「分析をしていること」を引っ張ってきているようである。それをもとに私どもの計画を立てるので、昭島市で統計等取りきれしていないものを東京都の調査の中から引っ張ってきたということであるので、もう少し表現を精査し、例えば注意書きで「東京都の〇〇調査」というかたちで表現をさせていただきたい。

委員長　　それでは本日はここまでにしたい。次回これがどうなるのか、そのあたりを含めて事務局から願います。

事務局　　3点ほど。

1点目。次回の日程。

2点目。ご意見等あれば事務局まで。

3点目。計画（案）全体で加筆、修正があることへの理解を求める。

委員長　　是非活発にご意見をいただいてよりよい計画に活かしていければと思う。